





なれないことを指摘した。そのことは、現実的に直面上に於ける実践的諸問題に於いてもあらはれている。

すなわち「われわれはすでに第二章、第三章、第四章ですべて明らかにした問題であるが、組織問題では、なぜプロレタリアートの中央集権的組織を建設し得る物質的条件が形成され、そして、なぜ中央集権的組織が必要かを理解しえず、分権主義組織(特に赤軍派、旧神奈川左派)におち入って、また「党を軍事組織として建設する」ことが、現局面で、権力問題に対する日和見主義と闘争しうる重要な武器であることを理解しえず、マリグラ組織論におち入っている。(赤軍派、旧神奈川左派)

政治問題では、階級闘争として革命戦争をとらえる事(プロレタリアートの経済的解放のためには、まず、黄金奴隷制度と私有財産制度を暴力的に維持するための道具であるブルジョア国家権力の打倒へ階級闘争を押し進めなければならぬ)の核としてとらえる事が、その核心であるが、これをいまいかにし、人民戦争(日共革命左派)や人類解放戦争(赤軍派)として旧神奈川左派は、階級闘争の非階級性に階級闘争の根拠を置くのではなく、個人の決意におくことによつて、プロレタリア階級の利害に立脚するのではなく個人や彼らの集団の利害にせいで、「勤労被搾取大衆」に立脚することによつて、プロレタリア階級でなく、個人や集団でブルジョア国家権力に立ち向うという急進主義的傾向におち入っている。——といった権力に対する急進主義的態度をとっているのである。

家権力に対する闘争において、闘った事自体は正しい側面をもちながら、プロレタリアートの強化にかならないのである。

われわれは、革命左派や赤軍派の諸君に対して、「革命の根本問題は、権力問題であり、この問題について、すべて実践的に解決を与えてしまつた形で連合軍が形成される程には階級闘争派内部の権力問題をめぐる論争はつまつていない。必すかかわらず、連合軍をつながらさもなくば、ソヴェエト権力(二重権力)脱けつながらるのであり、我々は、結果的には、そのような政治的性格をもたざるを得ない連合赤軍については、権力問題における日和見主義として八派諸派とは、数段区別しなくてはならぬ」と赤報紙1で態度表明して来た。

現在旧神奈川左派が、主張しているといわれるのが連合赤軍を現実に必要な過渡的戦術とする「無原則なソリアリズム」はブルジョアマスコミに他ならずそれこそが階級闘争派が、直向している困難を回避することになるのである。われわれが、過渡的戦術を現在とありうしたら、それは、党派間統一戦術としての具体的情勢での具体的な目標を決め、軍事戦術協定であろう。

現在「結合の前の分離」の時期であるとわれわれは考えている。「革命の根本問題としての権力問題」に対する態度こそが、最も重要なものとして、いわゆる「階級闘争派」諸党派間につめられなければならないのだ。

1971年11月日記

【注1】「第二にこの事を尋ねるから」から「指定されること」によって、世界プロレタリア独裁(統一共和制)の立場が、現実の国際階級闘争の基準である

ことをあいまいにしていることを指摘しておかなければならぬ。この文書「世界プロレタリアの綱領的諸問題」は12/18路線の確立を勝ち取つた当時の「四西派」と「神奈川左派」との合同文書であり、現在、神奈川左派に所属する幹事の執筆である。彼は、その後、革命の未来図の傾向に気づきその点について訂正したが、しかし同時に、田原世界プロ独論の政策主義的傾向の批判(それ自体正しい)を通して、われわれの最重要な党派性の一つである、世界プロ独(統一共和制)の立場をあいまいにさせ、連邦主義に一步後退させた。

すなわち、「中共を止揚する世界党としての党派闘争の展開にあっての一大中心環は、日共、自主独立の路線の本質暴露することである。……」からはじまる無題の未公開文書に於いて彼は次の様にいつている。

「われわれの『世界プロ独には、現実の社会帝国主義と革命的民族主義の国際路線に對置されるもので、抽象的『一國プロ独』や、『民族プロ独』に對置されるものではない。……」

「軍や武装の問題は、あくまでも国際反革命軍事体系と社会帝国主義を中心とした反革命に對する具体的な分析を踏まえて提起されるべきものであって、そのような敵一昧方關係に従属して決定されるべきものである。」と。

ここでは、「軍や武装の問題」を権力の問題として把握せず、「敵一昧方關係に従属」させてしまつており、「敵一昧方關係」を基準にしてしまつてゐるから、「世界プロ独は……抽象的『一國プロ独』や民族プロ独に對置されるものではない」とされ世界プロ独がプロレタリアートの経済的地位そのものによつて根拠づけられており、「社会帝国主義」や「革命的民族主義」に對する党派闘争において、彼らの国際路線を批判する場合、その基礎になつてゐる「民

族プロ独」そのものの根拠に對する闘争を通して行われなければならないことを忘れさり、世界プロ独統一共和制の立場をあいまいにしはじめてゐるのである。

われわれが、世界プロレタリア独裁(統一共和制)の立場をとつてゐるのは、現在の国際共産主義運動において、連邦制を主張する運動に對して、連立派、中国派、自主独立派等諸党派に對する、世界党建設のための党派闘争の基準の中心のものであると考へてゐるからである。

そして、それは、マルクス主義の次の様な諸命題の内容を根拠にしているのである。

①「近代工業労働、すなわち資本の近代的制約は、英でも仏でも米でも独でも同一であり、プロレタリアートからすべての国民的性格をはきとつてしまつた」(共産党宣言)

②「プロレタリアートの独裁の必要性をみとめることは、ひとりでプロレタリアートだけが真に革命的階級である」という共産党宣言の命題を承認することである」(レーニン)「ブルジョア階級は農民やすべての小ブルジョア階級を分裂させバラバラにするに對して、プロレタリアートを結果として、統合し、組織する。プロレタリアートだけが！大規模生産における彼らの経済的役割のゆえに！すべての勤労被搾取階級の指導者となる能力をもつのである。」(レーニン)

③「プロレタリアートには、国家権力、すなわち、中央集権的な権力組織、暴力組織が必要であるが、それは、搾取者の反抗を抑圧するためにも、社会主義経済を「組織」する事業において膨大な住民大衆すなわち、農民、小ブルジョア、米プロレタリアを指導するために必要なのである。」(レーニン)

彼は、連合赤軍に解体されることによつてこれらの諸命題をわすれ去り、無規定な「敵一昧方論」のおちこんでゐるのである。】



